



息
距
編

二十一
二十二
止

和装本
ハ 7
978
11



879
11

心
距
編

二
十
三
十
一
年

八
978
11

息
距
編

二十一
二十二
止

息距編

卷之二十一



息距編卷之二十一

平賊第四

島原記卷下

城乘之評定并水野日向守金言之事

一寛永十五年戊寅二月廿四日之早且伊豆守信綱之

陳所寄手之大名小名亦殘呂寄惣衆之語合有

之戸田左門進之出之江戶前之上使指下

人損不之撮之少以退治へとの上意言は

茶兵粮誥之仰付たり最早城中兵粮之由少

以間可程于殺之可申とて水野日向守立花飛



彈守老幼、西將の座、加藤の徒有る物、衆も其
 之所、伊豆守より日向辰如何思召、我は控も日
 向もつらき、片断事、極一所、指図請様との
 上意、奈思召、承成由、仰勝成、ハ名、多根
 誥、ハ本、此と思召、我は日向守所存、舊冬我ハ
 領分、頼との通り、節も伊豆守辰前後、おは先
 ハ本、極具、ハ物語、ハ去ル十月、一揆蜂起、切も
 江戸、注進、ハ極、吉利支丹共、所制法、ハハ巴、
 才の置所、ハ定テ有馬の古城、寄集り、ハハハ
 偏、上之、所感、先強、江、ハハハ、存殊、一日、姓、ハハ

此事、ハハハ、柵木ニ重ニ重ニ、所結セ、ハ九州、ハハハ、大各
 ハハハ、是、輕ヲ出、セ、勢、統、ハ上海、ハハハ、米、番、兵、ハハハ
 仰、兵、弓、鉄、炮、高、押、ハハハ、ハハハ、ハハハ、極、ハハハ、成、干、殺、
 ハハハ、ハハハ、ハハハ、既、ハハハ、権、現、様、遠、物、高、天、神、ハハハ、城、ハハハ
 ハハハ、ハハハ、兵、糧、誥、ハハハ、ハハハ、ハハハ、例、ハハハ、ハハハ、ハハハ、ハハハ、
 所、在、ハハハ、物、言、此、有、馬、ハハハ、城、ハハハ、ハハハ、ハハハ、先、年、我、ハハハ、守、人、ハハハ
 加、藤、肥、後、守、所、罷、有、ハハハ、時、分、昔、ハハハ、一、揆、ハハハ、就、リ、居、ハハハ、ハハハ
 責、ハハハ、ハハハ、能、存、ハハハ、後、嶮、岨、ハハハ、大、難、ハハハ、前、ハハハ、深、田、豆、場、惡、
 交、中、ハハハ、輕、乘、取、ハハハ、可、難、成、地、ハハハ、ハハハ、遮、豊、後、ハハハ、日、杆、ハハハ、城、
 ハハハ、ハハハ、ハハハ、ハハハ、城、郭、ハハハ、ハハハ、有、馬、左、馬、門、作、辰、先、地、

多事。名測。庭。淨。存。在。之。前。上。今。度。之。換。六。天。
下。の。仕。置。非。道。杯。中。事。一。に。有。之。已。く。り。ま。し。い。
の。心。を。佛。神。之。系。四。封。者。下。道。た。る。者。在。之。左。
操。之。所。歷。此。侍。之。仰。付。の。責。さ。せ。り。近。年。如。程。
之。物。々。事。に。起。り。も。無。之。り。珍。交。一。人。を。若。り。れ。り。
掛。り。及。所。も。勝。負。之。境。も。不。知。む。さ。と。定。進。
名。の。退。け。所。も。不。知。ふ。す。い。り。軍。法。た。て。仕。皆。
討。死。之。成。ハ。子。願。多。し。て。敗。軍。仕。事。眼。前。に。俄。に。
然。上。免。角。兵。糧。浩。に。仰。付。の。然。し。半。上。重。に。上。
る。由。中。に。一。戸。田。左。つ。き。お。り。そ。尤。上。由。請。合。

以。處。日。向。守。又。多。ハ。左。門。能。之。少。得。走。前。廣。之。り。
ニ。此。口。今。に。お。り。下。ハ。旧。老。ヨ。リ。多。日。向。中。所。と。各。以。形。列。
曆。之。侍。た。を。淨。討。せ。ら。成。比。上。ハ。兵。糧。浩。所。に。有。之。間。我。
之。剝。板。倉。内。膳。を。討。せ。上。ハ。各。二。三。三。切。崩。し。の。然。
存。下。去。城。没。り。仰。付。の。い。り。操。を。淨。子。配。有。之。以。承。
な。由。中。に。細。川。越。中。と。鍋。島。信。濃。守。と。中。ハ。西。人。之。儀。を。
御。覽。據。仕。寄。堀。ハ。子。近。り。付。寄。せ。り。明。廿。五。日。之。城。
乗。之。仰。付。の。越。中。守。三。曲。輪。信。濃。守。二。曲。輪。出。丸。と。
粟。取。之。仰。付。の。惣。子。ヨ。リ。と。各。と。作。せ。成。之。操。と。各。以。
伊。豆。守。左。門。西。之。就。と。請。所。と。一。座。之。衆。水。野。日。向。方。立。

花飛驒守同左近松平右馬佐寺澤兵庫頭有馬玄蕃
頭同兵部水野美作守小笠原右近左夫同信濃守黒田甲
斐守同市正有馬左馬侍同藤人松平丹後守松倉長門
守比叢中一圓分お不鷹旗に右近左夫有馬守
ありは度後とて五日向古りり二に曲輪出丸六三に
曲輪に俄に所能に仕寄りも近り寄りりし生上三に
曲輪に人数二九、蒼、多とある、一少も無造作に
日乗捕りし生上は衆仕寄り場は俄に所悪布留りし
両所より仕寄りて見、一縦仕寄り遠くは度後
とて、一西人斗り乗、一お残衆中、凱斗作り

て見物と成り有り度、お先日向守ふとハ左操ハ
罷生召あり、権現様以平三州小豆坂の改命、
初陣作り、生以後遠州諏訪に城乗し時子合初、
夫より教度ハ旗下ニテ働り外日本國を走廻りお
家的心操と添てハ五十度及人、越りハ生ハ
くハ一人、越り、多、ハさりみ多之に滅す
権現様天下一統ハ治先と奉り大合戦尾州長
久子濃州買ヶ原大阪ハ不及、一少能ハ少傳と
も仕事り、一とも終り操、凱斗作り、鶏軍子
逢り、一ハ無き、お此面、一と存りて城乗

何付り、大分人数も換りし江戸より此の控
昨日も多程友右衛門と等しく随分人数換りし様
しと座より仰下之、御意もお遣仕り上様宗
持の平地に戦と連る身の子の衆一入能、子と合せ
一和仕り宗持、不承致せし少成物に敵の堀に
内、身をさくし、下層に味方の的、成る
集り、いり多し存し、りも仕りく物
下、座、今出座後、福子と己下、各尸
夜多し、口より、是、竹釘軍と、物、
罷成り子細、以、伊豆、座、乃

上使の一向在之、座、召、一、能
所、一、定、一、座、の、向、有、尤、存、先、出、向
有、父子、之、儀、上、様、一、以、在、公、之、百
立、所、子、死、在、の、向、一、淺、座、之、百、之、以、左
様、の、向、向、の、向、一、老、是、之、長、生、誰、能、之、百、先
孫、向、の、向、將、美、作、有、残、一、宗、の、儀、定、お、極、
處、之、向、仰、中、一、美、作、茂、大、阪、一、大、和、口、一、後、藤
又、兵、傍、出、張、一、村、遂、合、戦、お、生、場、高、在、也、仕
人、之、向、之、一、羅、本、之、一、一、置、日、向、守、一、其、座、後

弥之助今枝勘傳門鈴木治兵衛藤井靱負鈴木久之傳竹本
左門右安左右三塚中左平黒川三郎左忠の渡部松右丈中山
外記磯部主税之介片山六郎左忠の鯉江五左忠の三村五左忠
新傳今枝甚左忠の金方中忠の少枝佐左忠の武者牛川河村
新八郎中川志摩鎮牛川上田清兵衛牛井甚兵衛神谷
左之元馬印牛川近藤七兵衛小野田正丈右家老組頭使
番物頭河村も武切右之考共召寄与申合、趣、先
子鍋島留堀之子、兼、り子原死人大分有之
然、時、鍋島留續、牛丸近兼、中、申、本、召、為、条
鍋島先子一戦傳り、と、合、人、教、い、む、時、跡、り、我、亦、者、共

無二無三二ノ丸、押入走、り、牛丸、と、め、け、一、番、牛丸、と、来
取、り、牛丸、本、は、夜、人、教、扱、作、州、渡、一、中、条、一、廣、之、以、り、
一、跡、見、物、之、傳、若、牛丸、落、葉、分、は、口、向、守、と、堀、之、内、へ
抛、入、り、牛丸、左、も、有、之、内、之、様、之、時、と、い、掛、念、頭、下、仕、向
り、我、亦、者、共、人、の、跡、と、見、り、侍、に、有、之、多、矣、い、何、程
強、敵、半、と、い、ふ、也、此、日、向、右、之、子、河、外、と、お、極、り、牛丸、と、兼
り、さ、ぬ、多、矣、と、多、補、い、若、者、共、も、此、夜、子、お、ふ、中、に、
又、二十、年、三、十、年、之、召、軍、に、有、之、も、不、知、少、し、隨、分、持、出、と
り、復、上、此、日、向、右、及、八、十、下、弱、と、た、し、云、行、掛、の、駄
賃、と、屋、上、ん、は、得、討、死、好、所、右、之、通、内、禮、軍、法、識、定

有之先之鎮馬印之在りて肝要之令然處廿四日景
ヨリ廿六日之晝迄大雨頻りに中く車軸と流しり付
以觸り不及し程に大雨故城乗お延し左に廿六日之
晩より天晴日和能羅成い又伊豆守信綱に此觸り十八日城
乗り付し条ぬ廿七日早大に戸田左門陳所各諸大将
衆は出合の在之由中未し事

二月廿七日八日原に城落去し事

一各諸大在衆二月廿七日朝戸田左門陳所、石寄左
守廿八日城乗り評定相極り既三日成已刻羅成若退
出の有之辨に處に条出之何事也余然所左門に在り

有之物見此勢籠番者けりきこ急に鍋島守り
城を乗中、由よりり伊豆守に付左様ニテハ
有之者交、いへ見中おとさ替に弥乗中、由中ハ
得る伊豆守輕き大将ニテ城橋へ走り見入ハ
最早火の子と上乗込中付諸將へ伊豆守に鍋
島守りふ意に乗込、上ハ此覺に乗取中ハ先陳後陳
兵有之ま、い各兵は心得いへと、中ハヨリ諸
大将好所之事あれど一同に相心得り、由り仰面之馬
と引寄り、打乗我々陳所へ鞭を打り馳歸り給鍋
島信州へ扱、私若共その内在りて仕出、突止り存由

中置すぐり出丸、誥惣鍋島士卒、向テ之連、卒忽、
棄爾せと不知せらる、各決大將衆すも、
子共、柵木際近人数、大將、以廢り、相待居
中、水野日州、其日、評定、出合、
鍋島城、東、由、中、付、五千、及、人数、を、押出、鍋島、任、寄
場、近、誥、掛、丸、付、下、息、美、作、吉、と、歸、と、う、お、待、者、ら、お、也
作州の馬、白河、月毛、と、云、て、
公方、お、領、逸、物、也
い、一、さん、し、乗、付、無、程、陳、場、へ、馳、美、作、守、馬、印、見、内、
と、均、惣、侍、共、押、懸、中、交、武、老、等、河、村、新、八、家、老、上、田
玄、番、作、州、誓、文、を、
中、に、
お、人、も、掛、り、
お、打、捨、

の、侍、由、其、苗、馬、上、具、足、ヲ、其、上、帶、と、志、を、侍、り、
い、得、と、再、拜、ヲ、振、之、也、我、り、鍋、島、手、之、惣、人、数、ヲ、押
合、堀、之、子、ヲ、乗、越、し、作、州、之、は、馬、逸、物、と、中、あり、是、場
悪、名、加、給、る、馬、ヨリ、下、立、自、身、鐘、ヲ、杖、突、堀、ヲ、乗、越、鎧、武
者、同、前、之、持、る、木、城、ヲ、目、掛、誥、平、ヲ、陳、而、懸、し、進、と、下
知、也、息、伊、織、十、四、歳、之、先、立、自、身、討、死、せ、せ、し、ら、を
生、ら、甲、斐、阿、多、と、云、ふ、劣、追、跡、不、祖、父、日、州、ハ、跡、
い、説、有、り、て、傷、有、
相、撲、之、者、又、少、以、傳、之、連、者、物、と
追、之、遺、一、急、ヲ、お、定、と、
本、城、之、儀、ハ、
山、崩、昔、作、州、父、子、之、急、と、被、告、相、鍋、島、者、共、出、丸、二、丸、と、大

勢死人有之存取給能幸其中心と作州押迫面と不振本
丸一乗掛給敵に出丸と鍋島より出板取乗出故一入出丸と
肝要に防ぎ戦い未二三ノ曲輪より丸に敵共引取らず
内美作守に仕懸付丸ノ大子云働有ら高石寺ら
も有或は錢ヲするものも有或は討死するも有深子原我主
也と云て引け退も有指敵も結句本丸の石垣の上り鉄
炮と十間十五間内外常ニ麻鳥様ヲ打馴多一撥共丸
ハ寄手出一とて虚矢あり去存本丸の石垣上下より
丸地衆兵之掛て討死し者浅浪舍人渡邊十左衛門海井
右馬从堀忠太丈石渡市平今井定信門一作深澤深栖太郎等傳

金万五郎太丈宮森長徳門片岡三徳門杉野又六皆川六
太丈廣田与惣左衛門小澤左兵衛廣田市兵衛は若共歴々
枕とありて討死する其外足輕又若丸一百余人即生
討死する也子原ハ不討死教也子打立少松豫申此
存丸石垣も高四間五間或ハ七八間有之所も止ハ乗兼罷在
處に作州父子自身乗掛来る若此丸乗取不中ハ
中へ生ら甲斐有問答と懸れくと再拜と取上下也
鎮守神谷左九拾本に鎮守内漸々奉持を来る鎮守
手ヲうけ存丸とんと持作州に馬印金の鳥を祿の〜と近
藤七兵衛小野田と丈と云若自身ハ川と日比鷹野康持

小山川達者のも此共之本丸、石垣に乗上り松丸と云ふ一者、
馬印ヲ押立續テ左之元旗をも入ル作州伊織父子も自
身石垣ヲ乗上リ凱音上り給ふ寄子此語人是之也了
不驚目と云物あり祖父日向者ハ二丸近誥掛作州父子
本丸に乗上給ふと見今生之本望不過美作守儀ハ大
阪三月廿七日、冬合之字名をも付し伊織事ハ未歲也
十四歳也初陳、自身本丸に乗上り水野家代武為孫
比事長生ハ此満是此上り、長後ハ大正の家来也老
もおもひ此働高名少可勝斗ハ中にも名譽働付ハ
美作守見小性ハ三好二郎九郎と云者也生働者前

廣原、城一番乗水野美作守内三好二郎九郎と云
可假名と紙札、書付具足、鼻紙入、所持ハ板城乗
時該子、孫見事也該人見之テ何リと云人ハ持
見有ありと名字と尋其時件ハ書付テ取出一語
ハ波シ是我ハ假名也後日此證據ハ本之と云詠
家の人、清取テ已乘此多先ト多ウリ、押入取テ歸ル
生殘者共後日右ハ書付テ持来リ二郎九郎持譽
者數人也依テ日向者美作守二郎九郎の才知と
譽給ふ善輩ト云此城ハ一番乗と志事誠ニ
英雄の武士ト云是ハ可申と亦も日州殿彼二郎九郎

前髪と押して、口感也亦美作吉小姓阪田小善と
云十四歳此若者有日向控二十五歳より内島京に
石垣百由由留守と残置也 此等脱字 右小善討死傳
目前也彼者討死ふと大丸在馬門横山半助と云陸
傳兩人追掛せし其首おし給ふ小善も亦友力以傳供
一丸乗込謀、善輩之心、付能事見事あり
と云各々答之と云付多利
本丸江大物より由自丸乗込給ふ、水野美作守父
子有馬左衛門佐嫡子花人斗也然、定美作吉と藏
人大方、争有之、子細、本丸一番乗、詮儀也作州と

鍋島後陳故鍋島一番乗崩し出丸より乗入二丸
より本丸、大子に責掛り堀北左右と打テ入給ふ
藏人寺深兵庫頭後陳小寺深兵庫先子と付ぬ付
傳吉人錢持せ主屋藏人より子丸と一打寄て本
丸の内松丸一捕合、乗掛五百斗在、石垣と令一豆
より石垣、上、乗上り給ふ時、諸勢一向て、名乗、今日
、城乗本丸、大将分、一番乗有馬藏人也、心有傳、能見
、置と高聲、名乗然、水野美作、由、鈴木、と、
と云者石垣、上、討取首共と脇置い、と、十二
字、錢と持居、是、掛、藏人、後、石垣、より、不上、一、押

一既鳥原の一揆去十月よりと越兵糧盡玉薬も
關之に法平當し不及是非依之一揆木打寄談合を
寄手陳に糧澤山を日振舞を濃茶あんと
云種に法斗を盡く由を聞い夜に給打而出を當く
物も大奪取敵陳を燒立油断して具足ヲぬき大尉
多信連荒肝を法ぶさせ或は味方打とせ関東江戸京
童に口すさみも云せも二月廿夜鍋島陳突而
出評議す其子組一先子三千人二子す青者物大將
有江監物一子二千五百人白者物白地江雅樂頭右両子
鍋島子へ出先子三千兩或百人白者布旗とあまし

持せして爰り二立置くと相定る是の野も山も敵と
せしむる也相詞の嵐、猫と答相争の右の肩ヲ
序をたぬき又荒ぶると一搦、鋒卷也向く久は
と立置り二千人袖を著物堂寄對島守鳥原に濱
邊岸に添へ出細川陳一丸となりて突掛の備也此外百人
水邊への連者と云くありあまおらげせ磯の上の後の山は
隱居を夜討凱を奉寄せ子の陳屋へ走入、是も火と
くけしむおらる黒田寄に、大將四郎天草丸迄を備
を扱ひ取に鍋島陳へ出者、細川陳の鳥原に引
入細川陳へ突出る者有に、引取但後を有之者

大鼓の鳴所へ来れと悉く能く合互に真宗も有之たり大
鼓と取出丸の下方日野に置て能く大鼓を打と定城
内ハいれもあつる居る敵居城中に忍び入り陳小屋火と
付り也有と用心を以ての子當無残所を配と定日能
て今夜丑寅の半に突て出人と支度と依之城内の者共妻
子の暇を休是れも有又あひのあをを取て二舎を源邊に
忍も有此故城中油断して在てはまた水野日向生捕の
者に尋知れり然所鍋島仕寄の者共堀の子近き故城四
一圍物音無之と審思ひ出丸の堀の上より一のなき
内と見逃を敵居之鍋島内同名安藝竹東際一あり

先の様子と見えては阿の堀くを出一城をえ入たる
の堀も之く無之府城に東と心は安藝守子の下に兵何れも
堀の子に乗之、田代興左衛門守人、田代次郎馬島、巢三郎兵衛
大木兵部石井、振之者二と争早く乗込出丸内へ馳入見い
へ、土と上ヶそく不し、小屋とくけ土子の間道あり右の者
共細道と借い先へ以て穴の中小屋より敵大勢出鐘
言突合鐘なる何事も首と取大木兵部喜日仕寄番、南
り先子に左金のくり月、括物多毛の出、紐ませて金の
ひら巻すといふも同じ括物故諸人見之而答は外
若き者も掛付、我先と乗入直搦二の丸へ向務押込

而凱と奉おたきかけんて乗敗ら敵も俄の多る周章
而防ぎ戦故柳原飛弾者鍋島子の為檢便日指原飛弾
者若共仕寄竹束と付習いとて先子羅在堀之内一入小屋
に火とかけし多し飛弾守者と相少し尤飛弾者息左馬佐
其歳拾七才早に二の丸は東に折り西風にて敵の方へ
吹付、加煙の二鍋島若とも突たり二ノ丸爰うこよて
戦有之鍋島一手の若とも思ひの高名者手柄存有り
二ノ丸而手負死人不知生數とす扱歸陳の刻お江戸に鍋
島背は軍法いよの詮議の時柳原とて鍋島不調
法斗を言ふ私者凡仕寄付習とて某店合城由小屋

火とくくち折前凡有う燒きへ最早無是非鍋島者
共不思寄俄に乗込中はは飛弾者と評驗使と付置へ
無給存者多しへ内証の儀いりも何進鍋島背は
知一番乗付近頃そへ本仕振曲とて思召との上意
して漸三十日斗鍋島も柳原も閉門に何付然も頓
而在に赦免と召出鍋島登城と云々夜九洲私者
共不付とて一朱一番乗仕背は軍法に府閉門に仰
付は尤玉極に存然もは慈悲とて早速は召出
雖有仕合に以座とて一歩礼とて上迄とては老中并
諸大名衆は鎮守の志音中へも不殘信濃守打廻て

今度九州に在る所の仕閉門は仰付可事速に居出
冥加に叶ふ事と申す方と傳へて江戸に及下は成
九州にて一揆退治に傳へる所の通りと
しとて男女童に及る事不詳鍋島初に及は傳
へしに又榊原飛彈守鍋島家の檢使に及は傳
る最寄飛彈守とあり鍋島一断りしと一揆者との
しとて仕寄付習せし成る所の諸取に及は五三石
ほど仕寄場分とて一と重専理ししに檢
使の事と事と一少斗に及は進下り然と一輕
被成事出頭人もしは所とて及は信州古人に

各は仕寄場を引分けて進下事ハ是尺も不罷制
子細に公儀より知行言割付は及は仕寄場
へは此の事閑は然是共近年加程に儀も及は一
若き者共仕寄付習せし成る所由は尤も存存に
某仕寄場の番仕者共とて及は代り仕寄場へ
差出は木に仕操とも及は習は傳へ成之とて
仕飛彈守理至極仕とて及は由に中日に仕寄番二
五三人宛飛彈守家本指加出とて及は及は及は及は
仕飛彈守者鍋島先子とて及は及は及は及は及は
も仕寄場五三石とて飛彈守信州とて及は及は及は

以時百教石高割之付知行と召上管。お究、交、信州
能分別放右之通。亦常之者に、檢使飛彈也
之、事、召、少、ふ、と、ハ、ウ、リ、ウ、リ、所、之、尤、之、由、諸、人、也
鍋島之感中事

黒田在備門佐一手之天草九葉事

一寛永拾五戊寅二月廿七日鍋島手より出丸之俄、乘、
之付、諸、大、將、戸、田、右、門、陳、所、我、も、一、と、我、陳、之、鞭、也
行く走之、亦、右、備、門、佐、也、之、剛、強、也、大、將、也
先年家来栗山大膳と云家老天下、訴訟仕既右

備門佐及對火村也江戸於山城大猷院様以直、分、事
之是非、之、備、召、と、之、之、定、之、右、備、門、佐、中、上、旨、云、分、事
之、一、理、也、如何、も、以、之、之、先、主、と、内、の、者、此、對、決、前
代、未、聞、也、以、之、上、私、儀、松、平、之、以、名、字、と、之、之、
以、南、家、對、一、冥、加、忍、多、手、之、只、切、腹、之、仰、付、様、也
之、之、之、之、上、旨、也、上、意、尤、之、有、之、而、右、備、門、佐、中、分、奉、也
以、直、之、之、備、召、備、家、来、栗、山、中、分、以、老、中、之、以、達
上、聞、之、交、右、備、門、佐、栗、山、中、勝、會、替、之、雪、恥、也、
の、人、之、之、天、草、丸、之、乘、掛、再、并、之、取、徒、膚、之、掛、り、給
不、黒、田、睡、鷗、事、美、作、之、云、家、老、諫、而、云、敵、之、是、程、鉄

炮巖に具足と着しるる 是亦予も無き 何れ
加搦す時大将の具足を 示名之 何とやん
乃之武者と昔のら取武逆嗜し上而殊の外
中し能く武篇達人の上し左之と及承し然上
鏡ら召し尤し由す存睡鷗諫理至極し一も右馬
依きくの上具足と着し甲と着し四方足 重葉
の毒成とてかちんの子中と以 弁葉包と云物 子
巻し掛出くし諸卒とらおせし天草丸の敵とす
立而働者五十斗大将今戸徳馬如下知黒田一
日向下防之右馬の佐 先子の少志とて 樹

兼、處、右馬門佐身兼鏡と持進出下知し右数代と若
共右馬の佐に用ひし事此時におたれ何とて子及此人
とも踏什乗ふし我右馬の佐一代に不足とす事不及是
非とて既、右鏡の石突と大地、突立八幡大菩薩も
照鏡のれ一足も引間おの由し 鉄炮繁所、堪給及
西之度之再許と取諸卒と、勇之共 終、お侍乗ると
然りとらし黒田睡鷗切若故段、床机、腰と掛敵味方
の様子と詠信しし右馬門佐に鏡とて、予は美作事 我
祖文如水と本及聞、る 程し事とて 何とて一方に知は
老し、仕腰板たるうと怒給ふ睡鷗し、未見を、以

聞度由仰睡鷗中ハ物志之存、物留城東トテ物ハ諸
子より乗掛リテ大形諸子の先攻掛ル事ト見合能時分是
ニ味方の手負死人とも踏付、其ニ世ニ乗テ終ニ乗捕
テ物留いしき、諸子も不進ニ早キ能ク一子斗乗掛リ
ハ城内の敵共者強ク攻メ方ハ助テ其の心取仁ト強クいれし
無理ニ不本物といふ存想、子大形乗懸時城内持口
の者とも子前の南を時分と見合、其ニ懸リテハ乗破
いその亦只故自是能時分とテ、再ニ中上、一匹にせき
ハ遊私事と云ハ少入無理、其ハ懸リテハ歴この者共
大分討死残念存存、昔ハ、右邊の佐甲斐同市正

其外家来の者も睡鷗切者今亦始テハ中上より尤と感
ニ忠之睡鷗ハ腰物トテ尊敬不斜ハ事

細川越中守忠利一子働之事

一二月廿七日己の不刻鍋島子より俄ト出丸二の丸、乗込
ハ存細川一子も三の曲輪即時、乗敗リ海子の方ニお係
而二の丸、切而入蓮池の左右の石より、い、と貴
守城中より、鉄砲石礮或ハ管ト火を付大材木をぶ
けり、或ハ熱灰を箕ト入来而振、け堀を乗者トバ、た長
刀或ハ長身の銃を以、たき、存、種ニ撮、ニ防、戦、ゆ、も
細川勢事トテ、誥の丸、真先、ひ、一、番、乗、込、者、も

増田弥一左衛門續作下山田新九郎河内守九右衛門也其外
 長谷川仁右衛門陸鉄炮を打ち鉄磨續而乘込此時手
 負死人及數百人去廿七日晚景園の刻浩の丸東の端を
 乘敗城内九曜の星の旗を押し漸日暮敵前へ柵
 木を借せ誥をけて夜と明し翌廿八日早朝四郎時辰
 が屋館を打入火をうけ即時焼立刺天地四郎時負分
 首細川家末陳佐佐屋の討捕之始故本丸の一番乗と
 江戸へ注進之とあり

原の城落去二月廿七日子負死人之事

手負千八百六十六人
 討死二百七拾五人
 細川越中守忠利四

手負千六百五拾六人
 同三百拾五人
 同三十二人
 同五十六人
 同八十三人
 同百六十二人
 同八十五人
 同七十八人
 同百七十九人
 同百二十七人
 九十七人
 三十七人
 百四十八人
 同十九人
 百二十七人
 同三十一人
 八十八人
 同六十八人

黒田右衛門佐忠之
 同名 甲斐守
 同名 市正
 鍋島信濃守勝茂
 有馬玄蕃頭豊氏
 立花飛彈守茂政
 松倉長門守勝家
 小室原左近大夫
 同名 信濃守
 松平丹後守

一 手負三百八十二人

水野日向守勝成

一 討死百六人

寺澤兵庫頭忠高

一 三百十五人

有馬左衛門佐

一 同三十三人

戸倉田左衛門

一 三百八十八人

松平伊豆守信綱

一 同三十九人

同

一 同四十八人

同

一 同六十八人

同

都令七千九百七拾余人
右者松平伊豆守以書出又分如此
落城之時討取敵の首數覺

一首或百八拾五

内天地四郎時貞首
神野佐左衛門討捕之

細川越中守

一五百七拾六

黒田右衛門佐

一六百九拾或

鍋島信濃守

一一百廿五

有馬玄蕃頭

一一百五拾七

立花飛彈守

一四拾七

松倉長門守

一貳拾五

小笠原石近大走

一十五

同 信濃守

一十三

松平丹後守

一十八

寺澤兵庫頭

一首八拾三

有馬左衛門佐

一拾八

戸田左門

一拾五

松平伊豆守

一拾五

諸家使者中

合貳千四百四拾余

右ハ松平伊豆守首帳付通如此

右ハ外女童子共都合三若少不足由

残方ノ討取落城の時射込逢或ハ火ヲ入焼失

又諸手生捕者有之といへも首とく首數の内入右

首亦討込燒殘首共女童子共玉まん悉取集

落城ニ而深田ハ柵木ヲ以突貫北面ハ獄門ハ懸
れハ夥多也

水野美作守と有馬藏人直ニ諍論の事

一水野美作守と有馬藏人ハ九一番乗の事ハ落城有之

而三月朔日藏人作州棟屋ハ某直ニハ今度廿七日

落城の時大将命ヲ自身ハ九一番乗込中ハ某

ニ其の由リハ美作守返答ハ其れハ藏人扱若某

左様の事ハ仰ハ九の儀ハ我ハ家来共是也トテ教人

子願死人在ニハ諍敵強ク防キ山ハ乗為タ任命

也ト拙者世倅伊織ト召斗再拵ト取クト知仕子願

死人とも踏付乗崩家来の者共も悉盡粉骨て上松の丸
へ真一番馬印と籠と入拙者儀はくらす 在之所脇曲輪
石垣の上の羅生は貴殿は乗来く由承り付則以使し違
ひ殊の外のせき返し有り重而不悔は意に加之拙者
家来鈴木半之丞と申者果一番乗あり断り徳徳の
上りて石うきともは乗方多言紛い半之丞次は居ふ
申哉と云元々半之丞も其外子廻りの者共大将
と大将の争ひ人の誥掛居り付則半之丞と召出花人
殿へ引合藏人より半之丞理り申ぬも是給し定テ
作州は乗じては度哉と存儀馬印有之所へ直

撮系最久の事殿は事、援群跡は存、由は然らば
半之丞も籠と馬印と見て、宜而作州も、うら来と利口
共、是中たらん、こん、人さの、半之丞、理り、申、居、る、哉
殿の一番乗、は、乗、り、證、據、は、罷、有、後、半之丞、は、以、其
殿の一番乗、は、成、り、申、は、花、人、自、身、四、越、し、眼、前、見、申
たる所證據、は、ま、り、申、は、か、と、自、身、乗、込、事、考、後
より此藏人早きに在宛、條左様、は、存、り、一、と、堅、固、に
仰、届、作、州、申、は、從、某、の、陳、屋、に、卧、居、て、し、馬、印、と、籠
と、一、番、乗、上、丸、入、は、是、一、つ、又、鈴、木、半、之、丞、殿、と、押、て
一番乗と、仰、り、所、と、二、番、乗、と、在、宛、て、石、垣、より、上、へ

引上りし是二ツ亦貴殿は出さぬ由申来り申即時此者
所より今枝甚左衛門使番を遣はし是二ツ是程多分儀と
亦より出さぬ者足輕共居申中一は出張高一番乗持
ヲ仰事殊の外は不案内候存候誠我亦采幣と
以下お仕大分家来能侍共と眼前之歴討死させ
願及敷百人者持骨兼崩剣の旗馬印と本丸印を
諸人目前の儀元は如法持取取と本丸と貴
殿の一番乗は侍中思ひも不寄事左様と罷成召
候能思案有候仰へし作州より花人より仰馬印も
旗も本丸一番は是より多分儀と去付某中様も大将分

自身乗上り事ハ拙者早々此大将分の一番乗と申す
我亦乗居候處迄ハ貴殿も敵突而出し候とは氣を
見へし出さぬ由殊の外花人せきり申す作州より仰馬
今雙方何角と申し共貴殿は廿九と申す一は我亦
一番乗にお入り候は合点次第候先は歸留は吟味
有ら重なり仰聞候と申し藏人より申す則退出候
候も主客共より荒成會人始驚目は鈴木本丸花人
腰送りし罷出候候と申すの藏人より言葉と申す
常のものにては是れを元と見ぬ始り申す目禮する又
ハよりみ付て通し候と申す候は候は候は候と云

葉を被懸此事何哉蔵人只ものうへハ無之由水野家来
の者共蔵人と譽りし其後三月四日五日の中、各陳拂
有之而歸陳也原の城と諸大名泉より人夫と出させ石垣
と山崩し破却せしれりて温泉山も若一揆共徳居
可申やとの事、諸子足輕と出させ山と、將共其も
敵千人も居不し麻摺大分出之、すハ敵出らると
驚嘆き谷へ落或ハ寸身と扱し死すも、在之何れ
足輕と云事ハ不分明事

寫原寄子の諸將歸陳の事

付り 松倉父子被爲流罪事

一去程、原の城落去悉破却平均して諸將三月中旬何れ
も不殘歸陳也伊豆守信綱左門氏鐵ハ有馬より大草
島へ渡海し、それより長崎、打越仕置より陸路と肥前の名
護屋同國唐津筑前の福岡の城博多表と順見し、豊
前の小倉、有歸着然し所、江戸より為、上使太田備中守
是も小倉、日牟九州の諸將悉小倉へ召寄、上意、趣、
渡今夜在陳、面、盡給骨落城、儀、満、是、被、思、召、
松倉儀、領、分、仕、置、ト、思、友、舟、島、原、一、揆、指、起、事、由、事、思、
召、依、之、改、易、ト、仰、付、森、内、記、ハ、視、ケ、嫡、子、右、近、ト、ハ、讚、州、
生、駒、寺、坂、守、ハ、視、ケ、弟、三、弥、ハ、南、分、松、平、長、門、守、清、取、テ、已

後會津へ領りて寺沢兵庫頭儀天草一揆蜂起に付而天
草島四弟石に召上流罪に儀と由赦免之由申渡也左名
伊豆守鍋島信州へ被下り今度無下知城棄被申事は
軍法に背由申す信州返答に私子の檢使榊原飛
彈守父子堀の子と乘り舟而我亦者共は檢使に由り
申有之に鍋島家の恥辱と存家来共乗込り由り
申其時信綱榊原父子に尋少交に飛彈守より申す
其通ては私世將若輩共無十方一香に乘込り
に付世將を打せり而に其曲存続に私に乗込り由り
信綱より然りと加ふ此儀お江戸に詮儀可有之由り

各退出也左極存於江戸有以冷味鍋島并榊原父子
閉門に仰付給ふも其程是に赦免の事

一 覺

- 一 松倉長門守霜月廿四日嵩原居城へ下着極月八日
有馬表一出陳
- 一 松倉右近霜月十八日嵩原へ着極月六日有馬表出軍
- 一 板倉由膳石谷十花極月四日從神代島原表へ打廻り
- 一 只日、神代へ引取ぬる吾嵩原へ羅越同八日有馬表出軍
- 一 鍋島人數極月五日今却近押来ぬる六日山子の有
馬表へ被押

- 一 有馬中務人教極月十一二日有馬表、末着
- 一 立花左近十二月十四日有馬表、着陳
- 一 松平伊豆守戸田左門三月四日有馬、着陳
- 一 上使井上統後守正月七日有馬、着
- 一 上使兼松弥左衛門正月七日有馬、着同九日歸江一併也
- 一 日根野織部正月八日有馬、着
- 一 上使右河指左衛門宮城越前守正月十八日有馬、着
- 一 本江指作太正月廿五日着
- 一 酒井同幡守駒長次郎二月朔日着
- 一 市橋三四郎二月十六日着

- 一 水野藤左衛門二月廿二日着
- 一 細川越中守黒田右衛門佐人教正月廿二日有馬、着
- 一 黒田甲斐守同市正月廿五日、着
- 一 有馬玄蕃頭二月朔日着
- 一 水野日向守同美作守二月廿三日、着
- 一 高原城代小笠原玄岐守末、高丹後守正月十七日高原、着
- 一 河横目下曾根三十郎二月廿三日高原、着
- 一 天草の城代松平主膳伊藤大和守河横目杉原四郎兵衛被遣
- 一 小笠原右近大夫同信濃守松平丹後守二月日有馬、着

原之城面之貴口之間敷覺

一百九拾間 鍋島信濃守請取

三拾六間 有馬玄蕃頭

一百拾六間 松倉長門守

九拾五間 細川越中守

拾九間 立花左近將監

七間 松倉長門守

三拾九間 有馬玄蕃頭

四拾間 鍋島信濃守

二百間 黒田右衛門依

板倉内膳正馬印白子箱切さきの半月家老池田

新兵傳 旗馬印之是

同主水正馬印赤き瓢葦上小態と付テ

石谷十花指物浅黄の四半金の五の字

松平伊豆守旗地白く紋ハ登橋子と付テまき有リ

馬印角取紙の急法と大馬印白き吹貫紋ハ同前家

老 和田理兵衛 小澤仁衛門 一作佐
篠田九郎兵工 石川左衛門

- 一 松平甲斐守馬印二段の羽熊
- 一 戸田左門騷地白^リ紋赤^キ丸^{三ツ}子^子 同前番指物
- 一 地紺面^ニ假名白^リ書付家老 大高金右衛門 戸田左門
- 一 戸田淡路守馬印すげ^多三^ツ子^子
- 一 同三郎四郎馬印三段の羽熊
- 一 細川越中守旗地白^リ上^ニ紺^の九曜下^ニ紺^の紋有之
- 一 馬印ハ狸^ニ緋^の歛^形下^ニ金^紙の切^き付^テ家^中番^指物紺^の二本^志ふ^い紋金^え上^ニ九曜下^ニ三^ツ子^子
- 一 使番免物赤^き子^子残^黄も有之
- 一 黒田石切門佐旗中白^シ上下紺^ニ下^ニ紺^の紋有之

- 一 馬印ハ奉書切^きの輪貫番指物白^き四本^志ふ^い銘^の出^一有^之
- 一 鍋象信濃守旗上白^下黒^助遠^塗合^下紺^の紋有^之馬印大^羽熊
- 一 同甲斐守馬印鳥毛の^ニや^子が
- 一 有馬玄蕃頭旗上白^下黒^釘貫^付馬印十^一文字端^ハ鳥毛^付て番差物銀^の矢^はき
- 一 同兵部馬印白^キ鳥毛^ノ二^ツたん^ゴ
- 一 立花左近旗上白^下黒^白紺^の紋有^之馬印シ^テ二^ツたん^ゴ大馬印旗同前^塗合^下金^のい^タ珠^数日

- 一 結紅番着物三本、赤い色旗と同前、柄付の鏡
- 一 小笠原右近大夫旗赤、白き三階、紋番指物
赤、四半、紋同前
- 一 寺澤兵庫頭旗地白、黒餅付、馬印、小熊二段、下、
下、金の切さきの、大馬印、白、四半、黒餅也
- 一 番屋物白、二本、赤い、黒餅
- 一 井上筑後守指物赤地、黒き五の字
- 一 同清兵衛差物赤地、金の丸の内、左、
- 一 榊原飛騨守指物白、四半、赤、五の字
- 一 同左衛門指物赤、四半、餅

- 一 馬場三郎左衛門指物赤、四半、白、五
- 一 松平甚三郎指物赤、のれん、上、鳥毛付
- 一 牧野傳右指物銀の札、上、は、に、付、へ、と
- 一 水野日向守馬印、黒鳥毛、上、三階、旗、黒地、白、赤、永樂
- 一 同美作守馬印、金のたも子、上、家、本、番、指物、馬、印、
四半、白、赤、銀、紋、付、ラ、旗、文、同、前
- 一 松倉長門守、旗地、黒、少、上、赤、筋、横、上、二筋、家中
差物、赤、緋、緋、取、織
- 一 原の城中、より、矢文の、寫
- 一 今度、為、り、及、龜城、い、若、國、家、の、望、宵、中、操、の、思

召也聊非可儀吉利支丹之宗旨從前之如法存知別
宗之宗物可不成故以法雖然從天下採教之度以
法度之仰付度之迷惑信就中後生大事難遁存此
以依不易宗旨色之正純明稠刺非人有之作法或現
恥辱或極窘迫終為後來對天帝被責殺畢其外志
法度者之惜色身恐呵責其故乍押紅淚散夜隨法
意改宗門以然處今度不思我之天意難斗惣操
如此燃香少也國家之望無之私欲之儀無法度如
前之器在少也右之法度不相替種之操之法純明
難渡之召魁弱之色身之而法度一其禱而肯無量之天主

惜今生總之露命今度之大事空表之羅成靈悲
歎才之餘以故如此仕合聊以非邪路以

二月十五日

四郎時貞

松平伊豆守殿

此夫細川越中守手之射出之云々

水野家之手苦才合衆次第不同

- 一 鈴木半之丞
- 一 江草五郎吉
- 一 砥部忠義
- 一 新庄次郎太夫
- 一 山本藤兵衛
- 一 鈴木主儀
- 一 山縣次太夫
- 一 楠本太夫
- 一 東津左衛門
- 一 中尾大學
- 一 小倉瀨兵衛
- 一 長井平左衛門

一 阪田久弥
 一 高橋孫兵衛
 一 酒井至之助
 一 福部作之進
 一 上原又左衛門
 一 小野田五兵衛
 一 鈴木平石丈
 一 磯川曲之進
 一 稻生角兵衛
 一 馬見九郎左衛門
 一 千馬七次丈
 一 馬場齋記
 一 阪田小膳
 一 福部國助
 一 三原勝八
 一 石原角之進
 一 梅村又三郎
 一 丹羽半左衛門
 一 流傳兵衛
 一 秋正左衛門
 一 清水市之進
 一 川上内花助
 一 村園十左衛門
 一 三好二郎九郎
 一 遠山六之丞
 一 有安長兵衛
 一 廣田七左衛門
 一 浅井十郎左衛門
 一 杉聖正左衛門
 一 今村甚左衛門

一 森林金由門
 一 湯川内花之助
 一 河部長兵衛
 一 阪田市之允
 一 松本酒之丞
 一 船橋勘之允
 一 磯部山三郎
 一 金万安之丞
 一 尾関左衛門
 一 廣田源之丞
 一 寺本九助
 一 水野作之助
 一 三宅与三左衛門
 一 藤部左平次
 一 堀江八之允
 一 加藤甚之丞
 一 同左平
 一 小倉政之丞
 一 北村角之允
 一 中村角之允
 一 安東久左衛門
 一 湯川軍兵衛
 一 酒井金左衛門
 一 伊余三之丞
 一 沃田久之允
 一 竹本孫之允
 一 今枝久之允
 一 田井至之允
 一 遠山内花之允
 一 目加田三郎左衛門

一 衣笠兵内	一 岩室源左馬	一 堀地考之進
一 仙石孫介	一 豊田三郎馬	一 久田見猪左馬
一 東唯忠	一 林小左馬	一 松壽十兵衛
一 樋口安太夫	一 佐木五郎	一 安田左兵衛
一 原田三郎兵衛	一 上田平六	一 生尔甚左馬
一 清水新五兵衛	一 中村半助	一 牧右馬之助
一 上田七郎右衛門	一 荒木左兵衛	一 三浦孫兵衛
一 浅井仁忠	一 金百平馬	一 舟井左次兵衛
一 中島九郎馬	一 中山外記	一 鈴木次郎左馬
一 加藤権兵衛	一 片山六郎馬	一 中山兵衛

一 光岡主膳	一 小枝作右馬	一 安藤右馬次郎
一 竹本三郎馬	一 高藤源馬	一 中山角太夫
一 酒井罪左馬	一 三ヶ角兵衛	一 赤阪長太史
一 岡崎才兵衛	一 樋口右馬	一 山壽猪場
一 伊吹考四郎	一 本内源兵衛	一 横川孫兵衛
一 今井角兵衛	一 浅隈武左馬	一 津田半介
一 松本孫兵衛	一 榑田左弥	一 吉川内匠
一 岩室龜馬	一 大屋半左馬	一 樋口彦兵衛
一 上田武太夫	一 鳥井甚兵衛	一 三村半平
一 芦田市兵衛	一 若部左近馬	一 富田興五兵衛

一木部房兵衛	一伊吹彦兵衛	一千種平左衛門
一土肥節兵衛	一安部惣兵衛	一高田次郎兵衛
一高田熊藏	一藤井三郎兵衛	一原田松之助
一今枝高兵衛	一遠藤理左衛門	一榑原高兵衛
一加藤平太兵衛	一河部新八	一中川志摩守
一黒川三郎左衛門	一有安左右馬	一小倉母左衛門
一塚本左平	一酒井七郎左衛門	一堀江五左衛門
一上田孫左衛門	一河村新七	一服部八兵衛
一伊吹町市	一石本祖文兵衛	一磯部主税
一井谷武兵衛	一磯 弥太夫	一岡本増左衛門

一栗山半十郎	一岡上左衛門	一市川助太夫
一酒井小左衛門	一青木小左衛門	一加藤重太夫
一伊藤左平	一石屋五太夫	一神谷新兵衛
一伊香甚平	一中川左兵衛	一廣田平太夫
一黒川孝左衛門	一上田弥兵衛	一高橋清左衛門
一上田清兵衛	一丹羽志左衛門	一高島八兵衛
一澤瀏左衛門	一清水佐左衛門	一八木八兵衛
一関弥次兵衛	一神部左平太	一平井弥吉
一上田藏人	一田中十郎兵衛	一市部次右衛門
一富士掛勘九郎	一鈴木治兵衛	一廣田右馬允

一 中山 是岐
二田去舊内
 一 玉置 五郎兵衛
同
 一 藤山 甚力之元
同 田書内
 一 高田 次左衛門
 右之内首と取末者も有或ハ大将の汚供能多能ものも有又少斗の能
 浅手負も有或ハ大将の汚供能多能ものも有又少斗の能
 言葉と多々 分古と合する者も有り いうは少家子苦と
 合中者とも如此其外書落しも有之も不知其節書
 付任有之ニ書画若也
 一 上田 玄蕃
 一 梅村 久末之助
同
 一 井上 七之元
同
 一 木部 門左衛門
 一 廣田 因書
 一 渡邊 勘三郎
廣田同書内
 一 榎本 征左衛門

肥前國高来郡村々付立

一 三會村 東空邸 大野村 湯江邸
 多比良村 土黒邸 神代村 比西所鍋 高領介 吉部
 西川村 伊福邸 伊古邸 三宅邸
 守山村 山田邸 野井邸 愛津邸
 同城より南
 一 萩原邸 今邸 比西所惣名 葛原 村と云 中木場邸
 安徳邸 深江邸 布津邸 堂崎邸
 小濱邸 賀津佐邸 津山邸 水岩邸
 有江邸 有馬邸 只津邸 西久我邸

比見

茂木村

此三ヶ處之長崎近所

此外子寫有加寫
右之邦一揆也

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

息距編卷之二十二

平賊第四

松平輝綱日記

國家久治弓矢永靖四海定一于戈不揚既有年于茲矣寬永十四年九州之民虜竊背憲法擴充邪說加之勒兵革却郡吏而結若于之徒黨於是霜月中旬板倉內膳正右谷十藏為幕使而發于九州矣同廿八日松平伊豆守戶田左門重奉安邊之命馳于彼地乃專令鉞之任督藩國十二萬之兵矣伊豆守集諸將去關筒原御陣之時信綱幼稚而不能服

戎事大坂御陣之時奉仕諸君宦居于江府自爾以
來世狃於治平遂絕格閣之疆場是故兵革之要未
敢能簡練是人所親知也然有意外之變泰典兵柄
信綱雖不敏自受命以來既懷元臣宿將之恩所以
如何者孤進遠境數不能伺中御諸軍之安危總懸
於一人誠不盡膽力致愚忠之時乎是以揮一私之
胸襟肆進止許多之大營諸將亦宜任從而勿違非
矣其所申令縱逆中旨雖被大戮不擁怨悔之心
且自諸將至陪臣有權謀異策則宜諫說之豈拘一
已偏籌而捍格乎雖然約束既布而後諸營不如法

則又是不能無憤悻之心然對諸將若于之兵何為
促我些子之卒若得保生命歸江城則須違台聽
然則饒令雖有有高者信綱尚不得已各朝府城之
時當相對而暢達素情是以所以不遺君且惜他日
之幕使也諸將甚感服之乃下令而付柵穿溝布
列營壘整肅行隊營陣之經緯諸軍無不感悅號令
申明舉世無不喟嘆於是近域隣境之商賈會聚而
為市交易無滯而諸卒樂之市中之法又遣每營于
御目附一人按察其教令且所令諸軍之品間課郵
驛而上表之或有廟謨之策以教書令之教書

未至軍中既以其策陳布諸營上書聞達之 教書
與上書多相合半途遠方城外之謀策與 中御如
合符節故數賜褒賞之手墨矣誠懿恩之冥慮武門
之遭遇何以加之哉是行也無大無小一不漏脫筆
記之而藏兩笥可謂累代之重器家傳之至寶也惜
乎罹明曆三年之火災而悉燒失矣予幸為苗孫令
筆記之然服我之年久未及弱冠只有壯奮之志敢
無瞻顧之畧且歲月遙隔記憶茫洋雖不擇策之臧
否事之巨細聚纂未精舛誤未削次序繁亂猶未能
記十分之一是以不要他之模寫擴布只於後來之

子孫者有識大概之小助寬文三癸卯二月中旬從
四位下侍從兼伊豆守源姓松平民信綱嫡男甲斐
守輝綱記之

上旬為征代高上使板倉將勝正源重正行
被差遣御目附石谷十藏令副從之廿八日仁重
為上使執事武州忍之城上松平伊豆守源信綱
行平口譜代之御家人美濃大垣之城主戶田左門
藤原氏致贈平伊豆守輝綱御馬助御金松月朝
遠而到太垣松平伊豆守輝綱御馬助御金松月朝

未至軍中既以其失使有請營上書聞建太...
與上書多相合并途遠方城水之謀與...
合符節故數賜褒賞之十墨矣試其恩之冥慮武門...
之邊通何以加之哉是行也無大無小一不漏脫...
記之而藏兩篇可謂累代之重器矣傳之車道也惜...
乎罹明曆三年之火災而悉燒矣夫予輩為古孫令...
筆記之於服我之羊久矣人狗冠之有壯奮之志放...
守懸懸時冬且成月逾隔地憶是洋雖不擇其之概...
和事可計於我矣其新無來新天計臨敵易果斐...
子對者實滿之此之也越道遠馬奔野六月庚寅遊

寬永十四年丁丑十月中旬松倉長門守領地肥前
國高來郡嶋原領荒寺澤兵庫頭領地肥後國天草
領之百姓吉利支丹宗門之徒黨蜂起二月霜月之
月上旬為征伐為上使坂倉内膳正源重正行年
一被差遣御目附石谷十藏令副從之廿八日仁重
為上使執事武州忍之城主松平伊豆守源信綱
行年四譜代之御家人美濃大垣之城主戶田左門
藤原氏鉄行年六被仰付矣戶田左門為用粧先
達而到大垣松平伊豆守拜領御馬黜御金極月朔
日可為發足之處公用依有之同三日辰一點伴嫡

男甲斐守輝綱行八年江戸進發同日一騎
馬上從大五十二騎此外乘懸步行侍
鐵炮內短八十挺此外父子持筒
弓二十張此外父子持弓
長柄鎧七十本此外父子持鎧
旗式五本此外父子馬驗
從卒凡千三百余人此外
國高末服氣賦是吉聖兵能瀨四郎左衛門
寛永十四年丁丑十月十日山中喜兵衛

兩人為兵糧出納以命扈從于西國
坊長兵衛時祐

極月大
自京都來三日
小幡勘兵衛景憲為送行自江戸來贈一首於武
田信玄家號之喧吃笠於伊豆

五日
六日大雨
七日
箱根
神原
岡部

八月廿八日 江戶進發袋井

九日 白須賀行侍

十日 此外國崎

十一日 此外國崎

板倉周防守源重宗為所同代往京都為對談附與

從卒於甲斐守十三日朝至伏見

從卒十二日 雪降 庄野

十三日 御勤之泉水口

十四日 伏見舟番

於小堀遠江守宅面謁板倉周防守源重宗 永升

信濃守大江尚政自

女院御所拜領衣服

姊婿天野豐前守藤原長信嫡男長三郎藤原長重

自京都來會即伴西國戶田左門氏鉄伴次男淡路

守三男四郎自大垣來會嫡男采女正以

氏鉄十萬石之内三萬石之勢而今留守大垣城板

倉周防守饋内飼一箇於伊豆守饋饋一本内飼一

箇於甲斐守

十六日 晚 伏見出船

大坂

十七日

同處逗留

石川丈山饋曹一道號鉅尖於中斐守

大坂御城代阿部備中守稻垣攝津守面謁

會風雨十八日同處逗留

自大坂載送大鉄炮於西國鈴木三郎九郎以有鉄

炮之鍛鍊奉行之至西國自京陸來十九日

伊豆守左門其外上使等為駕行豫課山陽道南

海道西海道之太名令出關船大坂御奉行小濱民

部少輔請取之松平伊豆守家中江相渡關船六十

艘載馬船十艘余各有晝夜之船驗自紀州大納言

頼宣卿役船者不課出伊豆守為響應寄八十丁立

之船伊豆守駕之甲斐守自阿波國主蜂須賀阿波

守粧來六十丁立之船仁駕自頼宣卿令御家人市

川甚右衛門兵吉田三右衛門山中作右衛門田屋

五郎左衛門寅二日討死扈從西國來

廿日播州室關

本多甲斐守同能登守同内記面謁備前牛窓

廿一日同國下津井

廿二日

同國下津井

廿三日

備後鞆

石川文山廿四日首 於同國只海

本城御斐廿五日 安藝全州

廿六日 防州上關

廿七日 長州下關

小笠原右近大夫同信濃守同壹岐守松平丹後守

渡海路而來謁 立之湖

甲斐長自前豐前小倉 自是至飯家

同處逗留 行程十里

城主小笠原右近大夫忠真贈步兵着用之壘具足

筑前飯家 自是至原

越有山 此間號冷水

黑田甲斐守同市正於驛路面謁

筑前原田 自是至寺

筑前原田 自是至寺

肥前守并原海 自是至

自是渡海路而至嶋原大風漂舟

同國嶋原之渚 自是

三日

同國嶋原之渚 自是

五日

有馬海上九里

去^此元日攻原城之處板倉内賸討死之旨告來伊
豆守附與士卒於甲斐守伴戶田左門氏鉄至嶋原
城而寓宿明日自陸路着有馬

四日未刻

有馬着船

槍柄與有馬之間陣取守同處備氣
令于諸手法則六箇條面說諸將并陪臣之準式別
書記之斐平同市五箇條面說諸將并陪臣之準式別

五日

細川肥後守光利自肥後國熊本引卒父越中守之

兵士而来自大坂御城令漕送仕寄具足鉄指配與

先鋒

為糾諸手之仕寄番松平伊豆守命使者番之家入

岩上角之助酒井三十郎長谷川源右衛門奧村權

之丞片山彌五左衛門小泉彦衛門六人晝夜令廻

諸手之仕寄後分六番且加平例之士一人令循行

七日

依伊豆守戶田左門下知寺澤兵庫頭自天草之内
大嶋子引卒士卒為上使無松彌五左衛門極月

廿五日 江口 廿一日

賊徒之將四郎母年廿歲討婦其年廿歲妹小左衛

門郎七歲甥小平禁獄肥後國依伊豆守信綱左

門氏鉄之命以之來意廿八日留船廿九日置

自海上廿三日雖合擊賊城舟亦城高而大約不

為上使水江莊右衛門來着南院大船在平戶即

課阿南院廿四日其船向賊城令放石火矢

廿五日

廿六日

細川越中守正月十二日發江戶令取來着有馬左

衛門佐美子息藏人來着

廿七日

廿八日

午刻為上使宮城越前守石川彌右衛門來諸手

久依在陳諸軍疲勞之故被成下十萬零六百十九

人之扶持方米知行高一萬石在四百人之扶持方

米之積也米穀者至近國之大名在陣之諸將課粮

米令運漕于此處其後於大坂賜白銀

二萬千六百八十八人 細川越中守

四千七百八十八人 立花飛騨守

千六百八十八人 松倉長門守

八千四百八十八人 有馬玄蕃頭

一萬四千二百八十八人 鍋嶋信濃守

四千九百二十八人 寺澤兵庫頭

二萬零八百八十八人 松平右衛門佐

二千六百八十八人 有馬左衛門佐

六千二百八十八人 小笠原右近衛

三千二百八十八人 小笠原信濃守

千四百八十八人 松平丹後守

四千八百八十八人 水野日向守

千五百八十八人 松平伊豆守

是者數過之上使并井上筑後守父子中坊長兵衛

鈴木三郎九郎能瀨四郎右衛門山中喜兵衛相加

伊豆守假屋中之故多於他之實數

四千八十八人 戶田左門

四百八十八人 板倉主水

六百五十一人 小身之面々十人分

凡十萬零六百十九人

外自長崎來工匠鍛冶等之作料有之

今按此書此人數一萬石一四人之積りを記した

りて其の兵數二一何らも錫島家書制に彼

家の兵三萬四千四百八十人といふ松倉も佐野氏費

書に三千餘といふ他の家もまた推して知らるなり也

令歸帆阿蘭陀舟於平戸

是書遺文廿九日

未刻松平伊豆守家人寺西太郎助假屋失火即時
撲滅是太郎助底置宇人山神彌四郎假屋之失火
也以太郎助密焚置彌四郎之科被追拂夜中板倉

主水亡父内膳石谷十藏江着來青山大藏少輔使

者假屋失火

晦日

二月小

朔日

爲上使酒井因幡守駒木根長次郎正月十日發

足今日來着

酉刻有馬玄蕃頭自江戸來

令四郎甥小平持中左衛門狀被遣城内趣

一筆申入候我等共召連候四人之者共五六日

以前有馬江被召寄御上使衆松平伊豆守様戸
田左門様御前江被召出候就其御上使衆被
仰聞様子一書久以申入候御披見之上御返事待
申候
一御寄手衆細川越中守様鍋嶋信濃守様松平右
衛門佐様有馬玄蕃様立花飛驒守様有馬左衛門
佐様寺澤兵庫様松倉長門様此外御上使衆
御人數十萬餘仁而候此已前八城中ヲ大方ニ思
召候之人數御ソコナヒ被成候カナ子テ御責被
成候様子ハ竹久心揃板カナクテ丈夫ニ被成

御責ナク候右ノ道具共御見セ被成候越中様
右衛門佐様一手ニテ成共急度被仰付候様
下御所望被成候へ共
江戸様ヨリ御説ニ吉利支丹ノ百姓原ニ侍衆
トナセ候事不入儀ト被思召候間柵ノ處江
夫ニ被仰付ホシ殺ニ被成候様ニ伊豆様左
門様直ニ被仰聞候事去年今年ノ内城ヲ落
心者合三四人御座候處ニ命ヲ御助被成其上金
銀ヲ被下剩其在所ノ内ニテ當年ハ作取ニ仕其
外色ニ忝被仰付様ニテ出候者不大忝カリ

候由兼候事
一天下様ヨリ被仰出候ヲ伊豆様左門様御直
ニ被仰聞候ハ吉利支丹宗ノ儀ハ當歳子ニ不
依御果シ被成候相定申候今發起ニ付テ前
ヨリノセンチヨ當分無理ニ吉利支丹ニ不
テレ罷成候者ハ被聞召届御助可被成候事上意
ノ由ニ御座候其子細ハ無科者ヲ御果シ被成候
事天下ノ御仕置ニ相違申候ト御定被成然ハ大
天野者ハ御吟味ニ天也ニ付テ分ハ御出シ可
有候勿論吉利支丹宗ノ儀具ニ兼届難有存候者

ハマリチリニ合申候ト又ハ菟舎仕相果候共其
段ハ銘々次第ニ有之候就夫我等共吉利支丹宗
旨尊ク存候様ニ御尋被成候共別ニ見届申儀無
之ト申上候親子親類大天野不殘吉利支丹ニ罷
成候ニ付テ一同ニ罷成候ト御請申候此上ハ各
様御分別ニ過中間敷候後世ニ付慥ニ御見届被
成候儀ハ尤マリチリニ御逢可被成候左候ハ
私ニ御断申上一所ニ相果申度候ハレモセンチ
ヨノ分御出シ候ハ私共城中江可被遣トノ儀
ニ御座候但各様我等同前ニ思召候ハ城ヨリ

御出シ可被成候事

一城中大将四郎ト申儀其カクヒナク候其年来
ヲ聞召候ヘハ十五六ニテ諸人ヲスミメ加撮ノ
儀ヲモ取立申儀ニテハ無之候ト思召候奈四郎
カ名ヲカリ取立申者可有之ト思召候左様ノ事
ニ候ハハ大将四郎ニテ御座候共罷出ノル者於
有之ハ御赦免可被成、由御座候事
一惣手ヨリ今度起候マキソヘニ成無理ニ吉利
支丹ニナシ申セシキヨ城中へ竈候者ハ不及申
又其身ヨリ望今度發候ニ付テ吉利支丹ニ罷成

只今ニ至迄後悔ニ存城中ヨリ罷出如本センキ
ヨ可罷成儀ニ候ハハ是又御免可被成、由ニ候
右之通ノ者共城中ノ出シ候ハハ四郎母同姉福
妹高ヲノコ小平四人氏ニ城中江御入可被成候
由伊豆守様左門様御直ニ被仰聞候事

一我等共如此之身上ニ罷成右之通申遣候事相
果候ヲ迷惑ニ存中人様ニ可被思召御心中御恥
敷存候努メ左様ニテハ無御座候兎角城中ニテ
相果候ハントノ儀ニテ候ハハ我等氏宗旨見届
申事ハ無之候ヘ尺城中ヨリ出申度ト申者尺御

出候ハ、御断ヲ申城中江參一處ニ相果可申
候加様ニ申事ニ無心元思召候ハ、矢留ヲ被成
御出合對面ニ可被仰付御意ニ候我ニ儀永ニ迷
惑成仕合ニ候間何之道ニ早カク申度候
余有無之御返事奉待候恐々謹言

二月朔日

大矢野

渡邊傳兵衛殿

渡邊小左衛門

合津七左衛門殿

瀬戸小兵衛

瀬戸理右衛門殿

渡邊 左太郎殿

各御中

四郎母遣城内状

一筆申マヒラセ候 上様御使松平伊豆掾戸田
左門様御前ニ被召出則小兵衛ヲ御使ニツカハ
サレ候マ、申越マヒラセ候我ハト被捨置候
テ永々迷惑ナル仕合情ナク存候城内ニ籠申
セシテ被出候テ我々共其モト江被遣候ハシ
ト、御事候間其御心得可被成候偽ト思召候ハ
ニ何ノ口へ成氏返事次第出對面サセラレ候ハ

シトノ御意免角各一取ニ何ノ道ニ成行申度候マニ御分別ヲ以人替ニ被成給候様ニ御返事待入マノラセ候賢ク返々四郎ハ其元ノ大将ノ申義候マニムカト逢申事成不申候ハ何ノ矢ナマニ成行出合對面可申候小兵衛事頓ニ御返シ可給候事賢ク

二月朔日

四郎母

益田甚兵衛殿

マニ夕名号利支丹ノ

同 四郎殿

同姉

御状ノ通具ニ披見申候御無事ニ御座候由此方同前ノ儀ニ御座候扱各御陳場江御越之通左様ニ候ハント存候由迄ナク候一凡如御存ヒイテス堅固ニ御届尤ニ候我々城中ノ衆ニ對天主如何様ニ此節身命ヲ可奉捧覺悟迄ニ候一門中何ニ相替儀無之候然者他宗ノ者ヲナカハテ音利支丹トナシ不申事ハ各御存知ノ前ニ候具ニ不反申落人ノ儀ハ如何程御座候トテモ城中ヨ

リ少マカニ申事ニ無御座候恐ニ謹言

二月朔日不申事ニ合津七左衛門

渡邊傳兵衛

瀨戸理右衛門

渡部左平郎

何三連判

瀨戸小兵衛殿

御返事

小平持返牒来兎徒入

掃密柑砂糖久年母饅頭芋

魁於紙袋而與小兵衛此外前後數遍有矢文爲計

策有返落人於城内之事

高田平丹

有馬左衛門佐家人有馬五郎左衛門於城壘與柵

ノ中間對話城中之賊徒三人是去比以矢文有通

達之故也

細川越中守從摺之前以望樓窺是城中

五

六

日

日

立花飛驒守自江戸来着

七日

子刻黒田右衛門佐殿屋失火城中之先徒望其烟相悦而舉凱聲

自江戸鍋島信濃守来
自豊前國小倉小笠原右近大夫同國中津小笠原信濃守豊後國高田松平丹後來
酒井因幡守駒木根長次郎歸于江戸自細川越中

守家人細川立孝越中守弟也假屋失火廿竈計燒亡

頃於城中度有鳴大鼓躍舞其歌云

一カキルニ寄衆モツコラレ寄衆鉄炮

一有ニ限カ寄衆

一有カ夕ノ利生ヤ伴天連様ノ御願テ寄衆ノ頸

ヲセント切支母

如斯賊徒會集而促踊舞歌聲鼓音喧于城外依之

諸部怪突圍出城之策故各戒備曾不怠惰

十一日

自初以金堀人令堀城之時城中又同堀來故放鉄
炮殺敵二人暮時自城中三丸烟光送出寄手料云
為城中失火然非燒亡而以生松葉蒸釜堀之穿來
通道之故也或令注糞穢滿流甬道

十二日

十三日

十四日

十五日

自近江國甲賀來隱形者欲入城中夜忍寄然城
中之賊無一人不西國語且吉利支丹宗門之稱名
聞而不得知者甚多是故不能交居城中之賊一夜
忍入城中之時賊知而逐之於是取堀畔之旗而出
城外賊以石強打之

十六日

寺澤兵庫頭前鋒捕落人而來其生口云城中糧米
乏去九日夜城中三手分雖相計破圍寄手仕寄萬
機嚴密之故休止此策云
大凡攻城之法圍軍必闕勿攻窮寇云雖然此城者

吉利支丹宗門之徒黨屯居之故務要賊徒一人不
亡脫是以自松平伊豆守著陣課諸手令二重堀堀
設柵堀中設蒺藜其後付竹東與西樓築土山城
甚屈之氣能敵敵於西來則其是也
為城中火十七日死而以其松平宗元各城之守
為上使市橋三四郎來着

為入城中十餘日
開而不閉十九日
中之無廿一日
市橋三四郎歸于江戸

同是又正廿一日

城中兇徒分其卒於三部一者竊出大江江可決勝
負寄衆諸勢採集而騷動之時一出出丸脇口迴諸
手之後付於殿屋以其光討寄手之人數城中之
先弱又可合凱聲然則寄衆之敗績必矣其時一出
兩口亂入假屋推取糧米鉦箭則城中得勢防戰可
保歲月如斯相計丑之刻一手出大江口發關而亂
入然其寄衆受敵備之外諸手各守備曾不驚動依
之出出丸脇口一手失度大半歸城內兩口之賊徒
不及出向兇徒之豫謀違失之故戰鬪失利而忽敗

北矣是生捕之口也松平伊豆守夜廻之家入岩上
角之助尼子八郎兵衛紀州大納言頼宣卿使者山
中作右衛門相改大江口仕寄番之節先徒即越柵
来角之助先諸人而以鎗撞伏兇徒二人相次而入
郎兵衛先徒一人作右衛門討捕之作右衛門對敵
鎗而傷股合鎗擊頭者衆之想其心其神一出
黑田右衛門佐備武以其先討捕頭數六十八
同家人諸將共而御之計手負百六十八人
黑田甲斐守備卒於三時一討捕頭數五十五
同家人四討捕頭數十一人

黑田市正備討捕頭數十一
同家人討死八十五人
寺澤兵庫頭備討捕頭數三十三
同家人手負九人
鍋嶋信濃守備討捕頭數百六十九
同家人手負二十一人
立花飛騨守備討捕頭數三
都合頭數二百九十五生捕七人
寅刻爲上使水野藤右衛門来著

廿二日

卯刻松平伊豆守戶田左門相伴而被巡見昨夜夜
討之場伊豆守左門令而使割賊骸之腹其腸中有
青蒼之物依糧米困乏而食麥葉歟

午刻自江戸水野日向守花息美作守來着

同日自江戸廿四日

同日自江戸廿五日 雨降

同日自江戸廿六日 雨降

爲上使三浦志摩守村越七郎左衛門來着

同日自江戸廿七日

自初有教旨云對黎首之賊何爲殺士卒只絕糧道
可令饑餓且制禁之宗門發起之刑賊也不可使一
賊亡匿之因茲付柵堀築距堙不費一卒而遂屈
賊情伊豆守左門相議云台命之要領不使士卒
戰死不使一賊亡走爲善焉關箇原大坂之兩陣既
經歲月當時弓箭之法修練之者希也且爲調習壯
年之士卒具器械而至城闕以倉卒舉城之策可決
些少之勝負共既合廿六日攻城之計謀然廿五六
兩日相續雨降是故議而限定廿八日諸手之竹東
近敵城其間僅五間計繪見諸手自初雖放鉄炮城

中橫堀地而防鉦箭然處自出丸東脇仕寄最先西
樓窺見出丸之內至堀之中見處無遺子故橫放鉄
炮賊徒無所依而退散因茲以使告向出丸寄手之
先鋒且賊徒退散出丸之時向寄手之料識寄手平
日望出丸今城中奔没出丸云則鍋嶋信濃守以使
者告奉松平伊豆守伊豆守相伴戸田左門氏鉄到
彼所巡見之上課信濃守輕卒令毀出丸之堀輕卒
出入出丸登堀毀之時自城中放鉄炮而倒絶輕卒
伊豆守左門下知引攀輕卒伊豆守直到戸田左門
假屋集列陳之御譜代衆暫有閑談然處自鍋嶋信

濃守備非令攻城他備之士卒見之各自相進當此
時紛々紜々以約束既明故諸部渾々池々無錯亂
未刻責取出丸荒二三丸百刻乘取本丸海手之方
本丸五分之一程依夜隱付拊待其夜之明

廿八日

諸手登入本城悉放火賊徒無一人不殺害于上刻
唱凱歌即各歸假屋
賊徒口津村山田右衛門作城中察別心自初面縛
今日寄衆小笠原右近大夫家人得之未
吉利支丹之法有故而制禁嚴密是以宗門之後依

舊歸佛法然而浸。吉利支丹者或藏其繪於壁中
或埋其器於土中既經廿余年之星霜寬永十四年
之春一人有沈痼之患不治殆及一年故街衢之浮
說多疑。斃殂於是吉利支丹之徒相言曰背我最極
之法入彼釋氏之門是非彼我之心只所以荷制禁
之重也當時一人斃逝二君未儲一天之萬機有誰
握之天主之宗法何人制之且領主松倉長門守施
苛政於士卒厚聚歛於百姓是以領內之衆庶無處
措手足是繼絕興廢之時也同志陰謀發起吉利支
丹乘釁而控長門守城招集萬卒柔服肥前國長崎

掠集所入之器財擴宗法於近域之衆民有不歸依
者則當燒亡其閭巷斬殺其衆庶九州者從來歸依
吉利支丹當此時不同心者必鮮矣故以法懷服以
勢平擊冬中遍安治九州及春可進師大坂賊徒之
陰謀斯窮矣
吉利支丹之徒木工右衛門善左衛門宗意山善左
衛門廿年以來道居天草內大天野子東嶋自去年
六月中旬五人相共語衆人云天草內上津浦住居
之伴天連廿六年以前自公儀被追捕即遣告書曰
自今年當廿六年善男子一人必可出生不學而悟

諸文應驗現天饅頭實于木扉白旗於野山立栗栖
於諸人之頭且有雲之燒東西國當此時諸人之家
屋及野山草木悉可燒失云云天草山天草山
天草大矢野四郎遺告書所謂善男子也云為天使
更無疑五人之徒以斯告諸人令崇尊四郎四郎生
年十六歲也吉利支丹發起當丑十月廿五日之頃
有動搖天地之奇事其時衆庶句驚五人之徒告之
寬永十四丁丑年十月廿四日松倉長門守代官林
兵左衛門巡視村邑之日到有馬村見號角內三吉
二人鄉民勤行於切支丹之法于與兵左衛門強罵

詈焉故二人之鄉民不堪而即時又殺代官終其事
發露而聞鳴原城果如五人所謂丑十月廿五日之
夜吉利支丹倉卒發起村邑之長民合計謀誑導衆
民募集銳卒鳴原所代之代官兵佐宗之比丘不歸
吉利支丹有悉斬殺之也居村邑所之松倉松倉
松倉長門守留守之臣聞之相驚帥士卒百余人進
深江討賊徒四十級即退松倉城賊徒追而責之松
倉士卒戰于城外即退而鎖門賊徒破門頻進城中
又竭力防之故賊徒遂退燒之闔闔道場各屯村邑
賊徒議云立四郎而為宗肯之司主乃差使謂四郎

云先年背宗門各存悔心今度立足下為吉利支丹
之大將可再興宗門矣四郎答云與予同志則帥諸
卒進師所不歸宗門者斬殺之可發起宗門乎縱
進師於何處必隨頻順予令者書記其人數向皇來之
云四郎者誘引人數七百計發起宗門而屯居大矢
野宮津矣嶋原村人之賊長即書記人數寄四郎四
郎引卒人數四五千許至嶋原內大江翌日議云諸
卒一萬二千分式部屯見峠茂木峠遣使於長崎
令問歸服宗門否若不歸依則進擊長崎四郎合謀
既欲令進發然自天草上津浦告嶋原內大江云今

度之子細寺澤兵庫頭留守之臣聞之富岡之城代
三宅藤兵衛為先鋒集士卒既進上津浦之近城嶋
子志掃急可令差來林勢因茲止長崎進發之議四
郎引卒賊徒千五百人許至天草加上津浦之賊與
寺澤士卒戰于嶋子殺藤兵衛又經二日伐富岡城
攻入二丸然不能舉城退至嶋原內津町長門守自
江戸至嶋原城且鍋嶋前鋒至唐子四郎聞之相驚
議云可籠原之古城既合計謀自丑十月朔且村村
百姓之飯米長門守所藏口津之倉廩糧米悉運
輸古城

同三日四郎至古城同四五兩日惣人數男女悉至
古城同五六兩日城之修補了同七八兩日城中假
屋成即立小旗同九日自天草人數男女凡二千七
百許入古城其所駕來船先大江濱之舟悉穿破為
城中堀陰之輔只遺三十丁立關船一艘身門在真
城中惣頭之覺

上總村 三助右衛門宗右衛門 道崎村 次右衛門
三會村 次左衛門次右衛門 力以村 吉藏右衛門
有馬村 次右衛門長助 串山村 惣太郎兵衛
有家村 甚左衛門入兵衛 深江村 甚右衛門

小濱村 久兵衛 安德村 久兵衛
千々岩村 大藏五衛 津浦村 市郎兵衛
大矢野村 七左衛門 上津浦村 市郎兵衛
以上村村之莊屋也凡三十五人

軍奉行
此前任修理處
松倉長門守陪臣
計四
松倉半之丞
十歲

醫師

有馬久意城計六

相津源計六

大右衛門

十二月廿日

之城攻之時右衛門作在其守方不知

子細之事正月朔日城攻之時極月晦日城中知之

故豫備防之城中戰死之者花蒙疵者九十七人也

二月廿一日夜討之事千四百人自大江口進松平

右衛門佐備六百人寺澤兵庫頭備自出九千人進

鍋嶋信濃守備自三九五十人進立花飛驒守備松

倉長門守備城中戰死花蒙創者凡四百三十人此

內百三十二人退歸城中此節右衛門作依矢文之

策露顯巨細之事不知之城中鉄炮有五百三十挺

玉藥自正月季旬已之絶矣雖然藏備少許十七日

城攻之時故之

城中之糧米自二月中旬既之絶而諸卒若之然貯

持少許者又有之

所竄城中之守人行年五六十之者四十人主或為

計策或討敵之虚實或進中退諸卒其守人皆不知何

許人

右衛門作者為四郎老臣而主玉藥資料天文萬
事之進退四郎於本丸圍碁之時自鍋嶋西樓自放
石火矢穿四郎左袖殺侍座之男女五六人城中之
賊徒以為雖情不測之奇妙四郎就中鉄炮且侍座
之男女亡滅是不吉之至也依之人心更哀自彼西
樓放來鉄炮多不外蒙疵死者甚多城中屈之
依之右衛門作心更無勇于爰自有馬左衛門佐備
令射天文云汝為譜代之家人是般以計策須盡忠
義云云以應諾報之即副從之賊亡百人之內得同
志之者五百人故廿一日自我守方三之丸導引寄

衆發火於城中令寄衆應于外予誑四郎寄衆既亂
入城中急駕濱手之船一且七出城中四郎應諾則
駕船擒之當盡忠義以此策二月十一日射天文於
左衛門佐備然不見得天文乎廿一日之約束相違
於是猶豫之處廿一日之晚景自左衛門佐備令射
天文云十一日之天文遲見得之故約束相違矣重
限時日且射天文云云城中見之相疑即謂四郎云
右衛門作忠有逆意即面縛而遣松山廿一日令將
來于本丸右衛門作妻子者廿七日於本丸大手口
升形之內令刑殺此日小笠原右近大夫家人見右

衛門作而既將斬之右衛門作呈示天文依之擒來
 誠出萬死遭一生者邪此外生日之中少無咎之
 昔豫有通達之者而助之
 三浦志摩守村越七郎左衛門歸于江戸細川越中
 守以廿七日戌刻落城之趣聞達之其奏狀三月六
 日至江戸云云松平伊豆守戶田左門尉八日聞落城
 之趣以次飛脚聞達之其奏狀同八日申刻至江戸
 云云

細川越中守源忠利
 子息肥後守光利
 肥後國熊本
 五十四萬石

立家
 手討死
 二百八十八人
 筑前國福岡
 五十二萬三千四

子息
 手討死
 二百十三人
 千六百五十八人

黑田甲斐守源
 手討死
 二百十三人
 三百十五人

黑田市正源
 手討死
 百五十六人
 百五十六人

鍋嶋信濃子藤原勝茂

肥前國佐賀

子息紀伊守

余三十五萬七千

同 甲斐守

家人 討死

六百八十三人

有馬玄蕃頭源

筑後國久留米

子息兵部少輔源忠頼

家人 討死

七百八十五人

立花飛騨守源茂政

筑後國柳川

子息左近將監源忠茂

今按少子立花飛騨守源茂政、正字茂也宗茂前

後敷名を改む初名を統虎といひ関原古陣の以ハ親

成といひ一あり然れども此頃ハ茂政と名を改め

もまた志る處からず今猶く舊名仍舊阿らため也

後の考をまら者あり

家人 討死

三百廿七人

寺澤兵庫頭源堅高

肥後國唐津

肥後國天草

十二萬三千石

家人 討死

二百三十三人

松倉長門守勝家

肥前國嶋原

同右近重頼 手負

四萬石

家人 討死

二十九人

小笠原右近大夫源忠真

豊前國小倉

十五萬石

家人 討死

二十五人

小笠原信濃守源長次

豊前國中津

八萬石

家人 討死

四十八人

松平丹後守源

豊前國高田

三萬七千石

家人 討死

三十一人

水野日向守源

備後國福山

十萬石

家人 討死

三百六十八人

有馬左衛門佐藤原直純

日向國

五萬二千石

家人

三十九人

板倉主水正源重矩

一萬千八百石

戶田左門藤原氏鉄

美濃國大垣

十萬石

子息淡路守

同 三郎 四郎

家人 討死

二四

松平伊豆守源信綱

武藏國忍

子息甲斐守源輝綱

三萬石

子息家人 討死

六百人

討死手負合 討死 七十百廿 八七百人 八千百三十五人

家人

三百

子息美孫子

六百

水增

八百

家人

三百

有馬玄蕃頭立花飛驒守板倉長門守備之御目付
牧野傳藏源 三十石

細川越中守備之御目付

馬場三郎左衛門 二千八百石

鍋嶋信濃守備之御目付

柳原飛驒守 二千五百石

黑田右衛門佐守澤兵庫頭備之御目付

林丹波 二千石

石谷十藏 千五百石

松平甚三郎源 千三百石

去元日 蒙疵

井上筑後守安倍

四千石

同息清兵衛安

中坊長兵衛

鈴木三郎九郎

七百石

能瀨四郎右衛門

百五十俵

山中喜兵衛

此外陪臣並諸方之使者罕人戰死蒙死者其時不
書呈故不載之

廿九日

為上使下曾根三十郎杉原四郎兵衛未着

伊豆守令諸將云在陣日久既積勤勞宜歸其國矣
自古治兵之時發火而燒營然此地非敵國且亡處
而絕人家為他日移來之百姓勿燒營屋

三月大

朔日

昨日有伊豆守令而今日諸將破壞賊城

二日

懸賊徒之頭於獄門籠城之人數男女凡三萬七千
人

三日

賊徒之將四郎一類悉被刃殺其外生捕令斬罪刺
至童女之輩喜死蒙斬罪是非平生人心之所致所
以浸之彼京門也

四日

五日

六日

七日

八日

九日

松平伊豆守引率雜兵二百計發有馬到嶋原家中

之士卒十四日發有馬十七日到小倉

十五日

嶋原逗留

城主松倉長門守日々面謁同弟右近去月廿七日
蒙疵之故不來謁伊豆守左門巡行城中去年十月
廿六日賊徒攻來所々其所穿破之城門是至水丸
無處不巡見

嶋原逗留

十二日

同所逗留

十三日

肥前國天草内須本著船於三角有遊詠

十四日

同國河内浦自平戶經海路而來甲斐守渡海路直

按直下疑有脫字

富岡

十五日

同國富岡自是渡海上

十六日

肥前長崎著船於茂木經陸路而來

同日平戶十七日

長崎逗留

為上使松平出雲守來着

十八日

同所逗留

十九日

同所逗留

廿日

同所逗留

廿一日

同所逗留

廿二日

同所逗留

為上使太田備中守源資宗來着

廿三日

同前逗留

廿四日

同所逗留

廿五日

同國平戶自長崎至時津陸路也大村松千代饗

應自時津渡海路而至平戶

城主松浦肥前守日々面謁且於城中有饗應

平戶逗留廿六日

同國

廿七日

同所逗留

阿蘭陀人例年為商賈來于平戶自構其住宅伊豆
守左門為巡見至彼宅二方向海高築石壁上構瓦
屋二方接陸亦構三層之瓦屋其高至檐間六七間
許疊石為壁其狀恰如見城闕

同國唐津廿八日

同國唐津廿九日

同國唐津三十日

同國唐津廿一日

同國唐津廿二日

著於名古屋遊詠太閤考家康公御陣所城主寺

澤兵庫頭面謁且於城中有饗應

同國唐津廿三日

同國唐津廿四日

筑前銘之濱

同國赤間

黑田右衛門佐同甲斐守同市正近來于驛路面謁

豐前小倉

公用有之至重論之時可止小倉之旨初次飛脚奉

書到來依之逗留

小倉逗留

小倉逗留

自是以前奉_レ台命太田備中守到着依_レ之有馬列陣之諸將可來會于小倉之旨豫相告之即諸將去朔日二日相追而參會今日辰刻集諸將於戶田左門旅宿備中守演說_レ上意之趣被預松倉長門守於美作國森内記被預松倉右近於讚岐國生駒壹岐守被沒收寺澤兵庫頭領地天草四萬石_レ諸將欲退散之時伊豆守止之曰有馬城縱雖以一手屠之犯軍令則信綱可遂確執之條預相約之然鍋嶋信州先鋒背法江府參勤之時發志惰云云

諸將被退散鍋嶋即刻到伊豆守旅宿憑家人少澤仁右衛門曰唯今所被暢達御鬱憤之條誠當然之至自堪畏縮然非我之背令併御目付柳原飛驒守所爲也此旨達長崎執柳原證文呈示而可謝之云云其後令家人鍋嶋若狹守齋柳原證文被陳謝

五日

小倉逗留
依細川越中守請伊豆守贈馬二疋

同所逗留

六日

七日

同所逗留 有相撲之會

八日

同所逗留 於城中小笠原右近大夫有饗應

九日

同所逗留

十日

同所逗留 於近邊之山田獵麋鹿

十一日

同所逗留 遊詠海布蒨之明神自是至赤間關之道

場毛利甲斐守有饗應

身代下關十二日

同所逗留

十三日

同所逗留

十四日

同所逗留

十五日

同所逗留 於小笠原信濃守宅有饗應且有相撲會

十六日

同所逗留

同所逗留 十七日

同所逗留

同所逗留 十八日

同所逗留

同所逗留 十九日

同所逗留

同所逗留 廿日 未刻小倉出船

長州下關

廿一日 未刻小倉出船

周防上關

同所逗留 廿二日

安藝全列

甲斐守遊詠巖嶋見平清盛一族所納之胴丸來會

此處逗留

於小野守廿三日 大津宅有餐在

備前國下津井

生駒壹岐守渡海路來謁

廿四日

播州室

廿五日 未刻小倉出船

到本多甲斐守領地湊之宅有饗應同能登守同内
記未謁

攝州大坂到著

同所逗留廿六日

同所逗留

於稻垣撰津守宅有饗應

於淀嶋崎之茶亭永井信濃守有饗應

長州下關廿七日

京都

於板倉周防守宅有饗應

同所逗留

於板倉周防守宅有饗應

廿九日

草津

於小野宗左衛門大津宅有饗應

五月大

朔日

水泊

於龜山驛本多下總守有饗應

於濱松驛高力撰津守有饗應
信濃守長崎奉行柳
於濱松驛高力撰津守有饗應
信濃守長崎奉行柳

熱田五振別署

於濱松驛高力撰津守有饗應
信濃守長崎奉行柳

岡崎

於濱松驛高力撰津守有饗應
信濃守長崎奉行柳

白須賀國司各事南饗應
信濃守有饗應

同日並留六日

袋井

廿八日

於濱松驛高力撰津守有饗應
信濃守長崎奉行柳

於濱松驛高力撰津守有饗應
信濃守長崎奉行柳

岡部
信濃守長崎奉行柳

信濃守長崎奉行柳

信濃守長崎奉行柳

於小林彦五郎三嶋宅有饗應
信濃守長崎奉行柳

信濃守長崎奉行柳

箱根
信濃守長崎奉行柳

信濃守長崎奉行柳

大磯

信濃守長崎奉行柳

十一日

江戸到着

十二日

有令曰明日為吉日之間可登城云云依之今日不速出仕入夜而竊被召二丸有馬之本只有台問御閑談之儀惣伊豆守不出口故今不能記之

十三日

松平伊豆守 戸田左門 御目見

松平甲斐守 戸田淡路守 同三郎四郎

於御黒書院 御目見

為檢判肥前國佐賀城主鍋嶋信濃守長崎奉行柳原飛驒守有命召来于江戸於評定所有再三之

點檢而飛驒守蒙御氣色令逼塞信濃守可停出

仕之旨有台命令閉門信濃守及歳末蒙宥赦

飛驒守至翌年被免許

戸田左門賜采邑大垣歸休之御暇表御感拜領

御脇指其外賜物如例々松平伊豆守翌年寛永十

六年巳卯正月六日拜領川越城关騎西禄秩一倍

而成六萬石且拜領去年租税正保四年丁亥七月

六日拜領常陸國府中元武藏國羽生領知高凡七

皇 萬古不易名義之尊且嚴起
出字內是以仁義並行文武
兼備瑞穗致豐細戈稱足風
教所覃率土底平以其本一
也妖夷則其地處西荒譬猶

腹腸也腹腸雖張大常蔽汚
穢故饕餮無厭唯利是貪任
胸臆而不疑大隄斯小君臣
盡惑蠢愚施小惑行小善其
極至無君無父所以為夷狄

之道也悠々之後唯見腸腹
之大而不知紗體之貴自視
為小則二其本而所謂用夏
變於夷也嗚呼我東照宮
恪守征夷之任尊大帝有言

王室攘夷狄洞察夷奸嚴妖法
神之禁文子文孫謹奉祖訓
驅除蕩掃不使夷跡交中國
以清四海數百年太平之基
未必不由於斯也歲月之久

或恐禁網漸踈而吞舟復漏
也區區之心既刺破邪集今
又命臣僚蒐錄當時驅除之
方夷奸之跡公之於世令人

王悟蘇美在好同之容在夷世出舉世志

神國之所以為

神國妖夷之所以為妖夷也茲

跋

景山



